

医学は進歩した。精密検査をすればなんでも分かる。と思うのかもしれない。が、それは問屋が卸さない。

81歳のSさん。1週間前から頭痛が続く。頭に異常はないか、MRI（磁気共鳴画像）で調べてほしいという。幸いにも、脳腫瘍や出血など、頭痛の原因になる病気は否定された。が、頭痛とは関係なく、軽度の脳萎縮が見付かる。

脳が少し縮んでいると聞いたSさん。「この頃、人の名前が出てこない。先日も行ったところで、何をしに来たのか忘れていた。認知症では？」と落ち込んでしまった。

で、Sさんを診察しなおし、夫からも話を聞いた。年齢相応のもの忘れはあるが、日常生活に支障はないのだ。Sさんは、認知症とはいえない。脳萎縮は、加齢に伴うものだろう。

脳萎縮とは、脳容積の減少したことをいう。だが、萎縮イコール認知症ではない。脳萎縮は、認知症以外に、脳血管障害や頭

部外傷、アルコールなど色々な原因で起きる。いや、病気がない正常な人も、加齢によつて脳は萎縮してくる。脳の神経細胞は、毎日約10万個ずつ減っていくからだ。30歳代から少しずつ脳の萎縮が始まり、高齢者では、だれが見ても脳が小さくなっていくことが分かることもある。

ところが、Sさんは納得しない。「アミロイドPET（陽電子放出断層撮影）なら、認知症と診断できるのでは？」ときた。だが、PETでアミロイドの沈着が検出されても、80歳以上の人の半数は認知症ではなかったというデータもある。

どんな高度の精密検査でも、過信は禁物である。検査は、あくまでも診断のための補助手段に過ぎない。ことに認知症の診療は、患者さんの診察と患者さんの生活状況をよく知る人から話を聞くことが基本である。医者も、楽はできない。

（石黒修三 しいしろクリニック・脳神

経外科医… 1121北國新聞掲載）